



雛祭と

その飾り方

山田徳兵衛



永い寒さに飽き／＼する頃、新聞の記事に雛人形のこと
 ちら／＼と見え初め、雛見世の明るい灯が街をいろどるよう
 になる。そして、やがて、春の樂しみの雛祭がやつてくる。
 さて、雛祭といふことはいつ頃から始まつたものであろう
 か。

古い書物によると、三月三日は一つの節句（節供）として
 上代は宮中にて宴會が行われ、その日は供物をそなえ、また
 鬪鶏あせせや、曲水宴まがみづえんが催されたことが記されている。曲水宴とは
 流れに沿つた所に坐して詩歌を作る遊びである。

平安時代の文献によると、当日、桃花餅・草餅を供えるこ
 とが記されていて、民間でもこれを行つてゐる。鎌倉時代に

は桃花酒つばなざけ、室町時代には白酒を供えたことが書かれている。

以上の催し事や、供え物は、雛人形に上げたのではなく、
 正月の七種粥ななつねがゆや、五月の粽と共に、節句としての供え物であ
 り、いわばお互いにお互いが飲食しただけのことである。従
 つて一応、雛祭とは別の行事であつた。

文献に、三月雛祭を行うことが現れているのは、江戸時代
 の寛永頃からである。「御湯殿上の日記」といふ、宮中の
 御日記の、寛永二年三月四日の条に「中宮の御かたより、ひ
 いなのたいの物、御たるまいる」とあり「時慶郷記」といふ
 書に、中宮東福院が「ヒナノ樽、台ニテ」酒宴をなされてい
 ることが記されている。これらが雛祭の最も古い記録である
 が、前に述べた節句の供え物は、そのまゝ雛祭の供え物にな
 り、節句即雛祭となつたわけである。

たゞし、三月の雛祭の記録が、宮中の書物に早く見えるか
 らといつて、宮中から始まつたということにはならないので
 ある。雛遊び（人形遊び）や、雛流し（自分の災厄を雛人形
 に負わせて流す風習）は、古くから地方の民間にあり、これ
 が地方人の集まる江戸に行われ、後に京都に移つたようであ
 る。元祿年間に出た「娘ちりけ草」といふ書にも「ひなあそ
 びは、あづまのかたには、おとなしき人もいはふものとしてす
 れど、都にはめ（見）なれず」と記されている。

雛祭が、今日のような形式に定まるまでの沿革は、なかな
 か複雑で簡単には述べられないが、大体このようなことでは



と判るかと思う。また源氏物語などに見える、平安時代のひいなあそび（雛遊び）や、ひとがたのはらえ（おほらい）等の、精神と行事が、その姿遷の中を貫ぬいて生きていることも見逃せない。

さて、江戸時代の初め頃の雛祭の飾り方を見ると、紙雛（立雛）を主としており、やゝ降つてからも、内裏雛だけがこれに加わつている程度である。

芭蕉に

内裏雛 人形天皇の御宇かとよ

という句があるが、

段の雛 清水坂をひと目かな

という其角の句を見ると、まだ当時は、内裏雛が主であつて段々に飾らなくてはならないほど、いろいろの人形を飾るところは珍らしかつたのである。それで其角がそれに興じて清水坂と洒落たのではなからうか。

今日では、雛段という言葉さえ出来て、雛人形は、赤い裂を敷いた段に飾ることがお定まりのようになったが、江戸時代の中頃までの絵を見ると、一段、二段又は三段ぐらゐに飾られているのが多い。

天明頃（百七十年ぐらゐ前）の几董の句に

うら店や 簞笥の上の雛まつり

いうのがあるが、雛段の形式の出来上る前には、簞笥を応用

したものもあつたのであろう。この几董の句は、あなたがち洒落ではないと思うのは、同じ頃（安永頃か）の磯田湖菴斎の浮世絵版画に、簞笥の引出しを、すこしずつ引出して、段々にして、それに赤い裂を掛け、男女が雛祭をしている図がある。

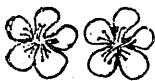
明治の末頃から、東京では、内裏雛（二人）官女（三人）雛子（五人）隨身（二人）衛士（三人）をきまり物と称して雛飾りの中心とすることになり、後には、これに十五人揃という名称まで出来た。

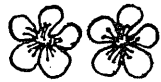
今日でも、この十五人の雛に、屏風・ぼんぼり・桜橘・三方・菱台・高杯・お膳を添えて飾ることが一つの定法となり標準飾りといわれている。

この形式は、永い間、数多い飾り料の中から自然に選ばれた種類であり、また、飾り方も、たしかに賑やかで、一種の調和があり、結構だと私は思つてゐる。

しかし、この優しく楽しい雛祭に、あまりきびしい飾り方などのきまりを定めることには、私は反対なのである。標準は標準として、場所の広さや、予算の都合で、いろいろの飾り方があつてよいと思うのである。

私の家に、オ、ン、ボ、ロ、のピアノが一台ある。二月





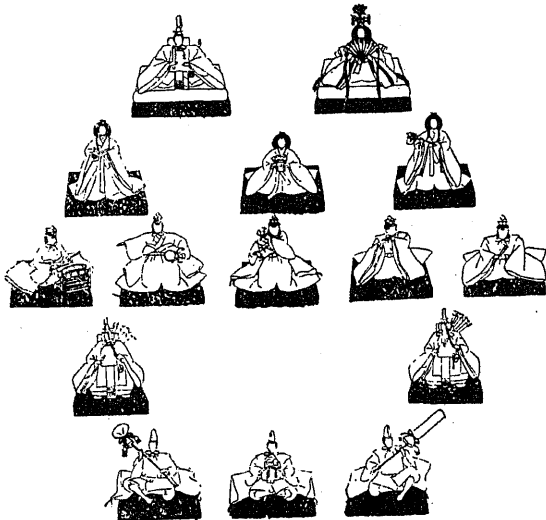
になると、私の家ではその上に赤い毛氈を横長に掛け、金屏風一双を置き、やゝ大きめの内裏雛一对だけを飾る。そしてその左右にぼんぼりを立て、高杯にあらねなど盛つてこれに供えるのだが、これが、なかなか風情があるのである。

時々、女兒たちがそのピアノをたたくと、そのたびに女雛の天冠のびらびらがゆら／＼と動いて、またひとしおの風情を増すのである。

雛段を、三段ぐらいにして、内裏雛と、三人官女と、隨身だけを飾る式もいゝものである。また、たゞ内裏雛一对を飾り、わきに桃と菜の花を挿し供えただけの飾り方にも、簡素なよさがある。

それだから、私は、雛祭の飾り方というものは、ちようど文字に楷書・行書・草書のあるように、いろいろのいゝ飾り方があるのであると、云いたいのである。

それぞれのお家で楽しく工夫して飾るのが本当であつて、



おひなさまの小道具のつけ方

一軒々々幾分ずつ違うのが、むしろ本式の飾り方であるといつてもいゝのではあるまいか。
たゞ、どの場合も、色のいゝ赤い裂を敷き、うしろに金屏風を立てることだけは、雛祭の気分を出すのにぜひ欲しいことだと思ふのである。

なお、幼稚園や、学校等、広い場所でする雛祭の飾り料は、なるべく大形のを選ぶべきで、そのため予算等の張る場合は、毎年一種ずつ買い足してゆくことなども、楽しい方法だと思ふ。

終りに、重ねて申したいことは——雛祭というものは、人形の飾り方の形式などよりも、みんなが楽しく／＼遊ぶことが主眼であるということ、いろいろ工夫して飾ることもまた楽しみの一つだと

（筆者、吉徳人形店主）
いうことである。

